

超人気FP!

— ABC ネットニュース —

深野康彦の 先取り経済NEWS!!

編集・発行 株式会社 アサヒ・ビジネスセンター 2017年3月3日

今月のトピックス 「主流になるのか? トンチン年金保険」

近年、「下流老人」が話題になっていることから、自分が下流老人になるのではないかと不安になっている人が多いようです。今や、男性の4人に1人、女性の2人に1人が90歳まで生きる長寿時代となっています。リタイア後は公的年金が生活の柱になりますが、その公的年金だけで暮らすのは難しく、また年金不安が尽きません。自助努力で資産の山を築いても、その不足分は資産を取り崩して生活していくことになるため、長生きするほど資産が底をついてしまうのではないかと不安になるのです。

そんな長生きの不安を解消する手立てとして、今後注目を浴びそうなのが「トンチン年金」です。トンチン年金は、一生涯年金を受け取る終身年金の一種で、その名称は仕組みを考えたイタリア人の名前に由来しています。終身年金は、被保険者が存命である限り年金が支払われるものですが、現在は、低金利の長期化により運用益を稼ぐことが難しくなっていることから、販売停止や高額な保険料を負担しなければならない状況です。トンチン年金では、年金受取開始前に死亡した人への死亡保険金などを抑え、その分を長生きした人への年金に回すことで保険料の負担を抑えているのです。端的に言えば、早く亡くなった人は不利になり、長生きするほど有利となる仕組みです。払込保険料と受取年金額から、正確には何歳で元がとれるか計算することはできますが、いつ亡くなるのかは神のみぞ知る、言い換えれば亡くなる時期を私たちがコントロールすることは不可能です。損得で加入を検討するのではなく、長生きした場合のリスクに備えるための年金保険なのです。

そもそも生命保険は「万一」や「もしも」といったリスクに備えるために加入するものであるため、トンチン年金も本来の保障を得るための保険と考えるべきものなのです。現在、トンチン年金を扱っているのは日本生命保険のみです。他社が追随するかは定かではありませんが、平成29年4月より生命保険の標準利率（金融庁が定め、生命保険会社が予定利率を決める際の指標）が1.0%から0.25%に大幅に引き下げられることが決まっています。標準利率が引き下げられれば、予定利率も引き下げざるを得なくなり、結果として個人年金保険などの貯蓄性のある保険の収益率はさらに低下することになります。貯蓄性の個人年金保険などへの加入はさらに厳しくなることが予想され、トンチン年金のような仕組みを取り入れざるを得ないと思われるのです。自助努力の一つである個人年金保険も「長生きした場合の安心感（保障）」を買う時代に変化しつつあると理解すべきでしょう。なお、女性の方が男性よりも長生きであることから、同条件のトンチン年金に加入するならば、女性の方が保険料は高くなっています。また、イタリアのトンチン年金は、年金受取前に死亡した場合の死亡保険金は0円ですが、日本生命のトンチン年金は、掛け金の7割程度の死亡保険金が給付されます。